



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

平野, 憲雄

CITATION:

平野, 憲雄. まえがき. 技術室報告 2003, 4

ISSUE DATE:

2003-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233254>

RIGHT:

まえがき

技術室長 平野憲雄

ここに技術室報告4号を発刊できたことを投稿者はもちろんのこと編集に当たった皆様に深く感謝申し上げます。

今年度の一番のトピックスは、一挙に6名もの定年退職者があり定員削減との調整により、なんと28年ぶりに若手の技官を3人採用することができたことです。親子ほどの年齢差があり自分の息子と一緒に仕事をするような照れくさい面もあるなど、今までとは違う新しい風を感じたのは小生だけではないと思います。その現れとしては、若手の活力を活かし技術官達の勉強のため技術室セミナーを新しい試みとして実行できたことと、大型の2つのプロジェクトに参加できたことがあります。

一つは、宇治川水理実験所での市街地氾濫模型実験の実働部隊を引き受けたことであります。8月から準備と実験を6名が担当し、延べ180日を越えました。その成果を防災研究所講演会で発表し、この号にも掲載できました。来年度も継続する実験がある予定です。

もう一つは、21世紀COE研究分担課題に技術室から「防災研究所で蓄積された印刷物や映像情報の電子ファイル化とホームページで高速検索可能なシステムの構築」のテーマで申請したところ、所長の応援と拠点リーダーのご協力もあり幸いにして採用されました。技術室としては初めてのことであり、たかだか3ヶ月間ですが、臨時職員を6名も雇用して防災研究所年報の電子ファイル化作業を行っています。受け入れ準備も大変でしたが平成14年度末までには年報の既刊およそ20年分の処理を予定しています。

このように活発な支援活動ができたことは所長はじめ大型プロジェクトを企画された諸先生方のご理解とご協力があればこそであり、技術室の沢山の人員を長期間投入できたことも幸いしています。そして長年培った年輩の熟練技術と若手の最新技術の融合でうまく対応できたものだと思っており、今後の良い前例になってますますの活躍ができるよう期待するものです。

宇治川水理実験所本館が老朽化で危険のため取り壊しになりました。思い出の一つが消えゆくことになり、ここでの研究実験をされてきた諸先輩たちに寄せ書きをお願いしたところ快く引き受けていただきましたので掲載することができました。記して感謝いたします。